

平成紙



おりおりの記

CIAにいた日本人起業家

大和総研
副理事長

川村 雄介

カリフォルニアの日系人にしては、東部アクセントが強い英語を話す。静かな物腰と時折出る京言葉で彼が日本で育ったことがわかる。

ジェフリー樫田、67歳。伸びた背筋と歪みを見せない足腰は年齢を感じさせない。この日はシカゴのイベントをこなして、深夜にLAX空港に降り立つと、お気に入りのレクサスを駆ってトーランス市内の会社に戻ってきた。静かに澄んだ夜気の中、丘の道の右手遠く、湾の向こうに明滅するサンタモニカの夜景が妖艶だ。

会社で彼を待ち受けていたのは二人の役員。緊張した面持ちの彼らをニヤッと一瞥すると、ジェフリーはコーチの頑丈そうなバッグから何やら取り出した。手にしているのは日本製のフィギュアだ。世界的なブームを生んだボーカロイドの新作である。ジェフリーの経営する会社は、いわゆるサブカル関連の事業を展開している。

「こいつは間違いなくブレイクするよ。リンダも同意見だった」リンダとはリンダ・リー、VAMPYのニックネームで全米に知られるサブカルの若き女性カリスマだ。

若き日にモータウンに酔いしれていたジェフリーが、21世紀の最新カルチャーのビジネスに従事している。その若々しい進取の心には脱帽である。

京都生まれのジェフリーが渡米を思い立ったのは大学卒業直後だった。「日本は狭くてね。それに発想が固いから」単身、ロスの英語学校に飛び込んで地元の大学に進学、抜群の成績でコロンビア大学の大学院に編入された。国籍も変えた。コロンビアを出ると就職したのは米国中央情報局、

CIAだった。さすがにジェフリーもCIAでの仕事の話は一切しない。ただ、「辞めてからも10年尾行が付いていた」そうだ。

民間人としてのジェフリーは、日系現地法人の役員、経営コンサルタント、米国企業

の顧問などを歴任した。いつしか「通」の間では企業の経営立て直しの名手として知られるようになった。そんな彼が依頼されたのは、日本の伝統的玩具会社の加州現地法人の活性化だった。彼が目をつけたのが、そろそろ認知され始めていた日本のオタク文化。スーパーマンやワンダーウーマンとともに日本のフィギュアを積極的に取り扱い、全米コスプレ大会、アニメフェスティバルにも毎回参加した。

現法の経営状態は格段に良くなった。ジェフリーは、北米の販路強化を進めつつ日本企業とのアライアンスを強化し、アジア市場に本格展開を図っている。クールジャパン・ブームも追い風だ。

「70歳には自分で誕生プレゼントを用意するよ」ウィンクすると「IPOさ。市場？自由と元気があるところならどこでも良い」

彼へのプレゼントの場が、日本のマーケットであることを心から願っている。

